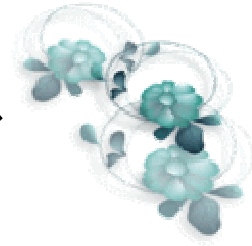


穂鷹良介先生の死を悼む



旧(株)日本システミックスから生まれた弊社の兄弟会社である(株)データ総研の椿正明最高顧問と、データ分析モデルであるTHモデルを共同で考案された穂鷹良介先生が、昨年10月21日にお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

当誌をお送りしていた穂鷹先生からは、当社からの暑中見舞いの返信(06.7.28日付け)に以下のようなメッセージを頂戴しております。

「基本的な問題解決に、時流に流されぬ originality を追求した対応に敬意を表します」

以下に椿正明様からの追悼文を掲載いたします。

1



穂鷹良介さんの思い出

椿 正明

穂鷹さんとののはじめての出会いは、ユニバック総研でのデータベース勉強会だったと記憶する。1972年ころだったように思うが、担当の穂鷹さんは、新しい理論を述べた論文等を明快に解説され、またその快活な人柄に魅了された。

私は当時千代田化工建設にいて、プロジェクトの上流から下流までのデータをストアするプロジェクトデータベースを用意し、これによって各アプリケーションをつなぐ統合システムの構想を立案、予算を獲得して、これをサポートする一種のエンジニアリングDB

MS「DPLS」の開発にこぎつけた。

しかし、自分たちのメンバだけで開発するのはシステム技術的に不十分ということで、穂鷹さんに相談し、当時穂鷹さんが部長をしていたSSL社に支援をお願いした。

すでにTH(椿・穂鷹)データモデルの原型はできかけていたが、サブタイプの表現や、DPLSを駆動する核となるリポジトリの構造設計などに貴重なご意見をいただいた。「コードは一つの観点ごとに用意すべきだ」という穂鷹さんの主張は、今でも印象に残っている。

DPLSの開発過程でデータ分析のモデル(の初期バージョン)が完成し、THモデルとして発表することになった。

その後幾多の変遷を経て、THモデルをベースにした方法論を普及する会社を作らなけ

2

ればならないと一念発起し、1985年データ総研を立ち上げた。

そのとき穂鷹さんにも株主をお願いした。長らく無配を続けたが、昨年2006年6月8日の株主総会でようやく若干の配当を出すことができた。当日、穂鷹さんの顔色は悪く、間もなく入院されたとか、これが今生のお別れとなってしまった。もう一度鎌倉にお越しいただき、鎌倉の山菜や私の手料理を味わっていただきたいと思っていたが、それもかなわぬことになってしまった。

穂鷹さんは囲碁、私は将棋。穂鷹さんは初期のアップルを買って楽しむコンピュータ好き、私はコンピュータ以前の論理モデル指向。穂鷹さんはSAPやLYEEの良さを評価するが、私はその限界が気になる。こんな正反対のところもあるが、似ているところもある。

初めてお会いした時、穂鷹さんはベルトに財布を括りつけていて「変な人だなあ」と聞いたりしたが、今は私も自作の小銭入れを括りつけている。失くさないのがメリットである。

穂鷹さんは声が大きい。私も負けずに大きい。30年前、千代田化工でDPLSを設計したときも大部屋で議論するので、周りはいぶん迷惑したとのことであった。データ中心についての確信はお互い変わらないものを持っていて、しかも囲碁で相手の石を取るとき以外は、悪意のない、まったく素直な子供のような性格、何の心配もなくストレートに議論することができた。このような人柄はどうしたら作れるのか、いまだ解けない課題である。このすばらしい男、ご主人を失った奥様の無念は想像を絶するものがある。

ご両親は長生きだったので、多分BCGによると思われるC型肝炎さえなければ、長生

きされたはず。亡くなる数日前、「やりたいことはすべてやった」と述懐されたとか。多少の慰めではあるが、残されたわれわれ、今しばらく自分の課題と取り組んで、後に続けられればと思う。

椿正明氏は、去る11月17日に(株)データ総研の会長引退記念講演会を開催されました。

旧(株)日本システミック出身の社長としては、2005年9月に(株)プライドの松平和也氏が社長引退記念講演会を開催されています。

もう一人の上野はどうなっているのか、と多くの方から気を使っていただいておりますが、まだまだ新事業が軌道に乗りませんので、20年若返ったつもりで頑張っていきます。

ご支援いただけますよう何とぞよろしく願いいたします。(上野則男)